

第63回 全出版人大会 開催

2024(令和6)年5月7日(火) 於 ホテルニューオータニ



出版クラブ会報
No.624

大会会長の挨拶

今大会をジェンダー・ダイバーシティ推進のきっかけに



野間 省伸

(のま・よしのぶ)



主な記事

- ▽第63回全出版人大会開催
(挨拶) 野間省伸 大会会長、喜入冬子 大会委員長、今枝宗一郎 文部科学副大臣、倉田敬子 国立国会図書館長、堀内丸恵 大会副会長、光村図書出版 吉田直樹さん、小野寺優 大会副会長、高橋書店 金子文さん、笠浩史 衆議院議員、下中 美都 出版株式会社理事
- ▽第63回全出版人大会 記念講演レポート
(出版歳時記) 紙からネットへ 媒体は変われど……岸 政彦氏……

第63回全出版人大会は、2024年5月7日(火)午後3時より、千代田区紀尾井町のホテルニューオータニ・鶴の間で開催され、来賓・出版関係者約400名が参集した。

第1部式典では、野間省伸・大会会長(講談社社長)による挨拶で開会し、喜入冬子・大会委員長(筑摩書房社長)の挨拶と大会声明朗読に続き、今枝宗一郎・文部科学副大臣と倉田敬子・国立国会図書館長からの来賓祝辞をいただいた。

長寿者祝賀と永年勤続者の表彰がおこなわれたのち、「息を止め海に潜る」と題し、岸政彦氏(社

会学者、京都大学大学院文学研究科教授)による記念講演が催された。

第2部では、下中美都・出版株式会社理事長(平凡社社長、日本出版クラブ理事)の乾杯の発声により、懇親パーティが幕を開けた。会には、「学校図書館議員連盟」と「活字文化議員連盟」の笠浩史事務局長(衆議院議員、元文部科学副大臣)や、樋口高顕千代田区長も駆けつけた。

帰り際、参会者全員に記念風呂敷が配られ、柚木沙弥郎氏・原画と名久井直子氏・デザインによる「鮎を食べる怖い顔をした熊」がかわいいと好評だった。

本日、みなさまには、お忙しいなか、全出版人大会にご出席いただき、誠にありがとうございます。

ご来賓として、今枝宗一郎・文部科学副大臣、倉田敬子・国立国会図書館長にご臨席を賜っております。お二人、誠にありがとうございます。

長寿祝賀と永年勤続表彰のみならず、本日は誠にありがとうございます。長年にわたる出版界へのご貢献に大会を代表して厚く御礼申し上げます。

この後、筑摩書房代表取締役社長の喜入冬子さまから、大会委員長のご挨拶、大会声明を頂戴します。

女性の大会委員長は63年の歴史の中で、2人目となります。ジェンダー・ダイバーシティの推進は出版界においても大きな課題です。

また、その後の記念講演では、京都大学大学院文学研究科教授の社会学者・岸政彦さまにお話しいただきます。

今年も第二部として懇親パーティも開くことにいたしました。お時間の許す限りご懇談いただき、本日、出版界のこれからを考える機会となれば幸いです。

簡単ではございますが、大会会長の挨拶とさせていただきます。

(講談社社長)

■大会委員長の挨拶

柚木沙弥郎先生に感謝して



喜入冬子

(きいれ・ふゆこ)

本日は雨・風が激しく、大変お足元が悪い中、長寿祝賀の方、永年勤続表彰を受けられる方など、たくさんお集まりいただきましたこと、本当に感謝いたします。『大会委員長』ということを言われたのは昨年の末でして、名だたる歴代の委員長の方たちの名簿を前にしてあせんとしたのですが、ちよつと頑張ってみようということでお引き受けすることとなりました。

大会委員長としてするべきことは、大会声明を書いて発表すること。講演をなさる方を決めること。そしてお土産の風呂敷をつくること。この三つです。一番楽しそうなのは風呂敷だなと思います。今回は、わが社でよくお世話になっております、柚木沙弥郎先生の絵を使わせていただいで風呂敷をつくらせていただきます。昨年末頃をお願いをして、快くお引き受けいただいたんですけれども、皆さま、ご存じのとおり、今年の1月末に100歳で亡くなられました。先生が描いてくださった熊の

絵は、昨年、私どもでつくった『熊の肉には飴があう』という文庫本のために描き下ろしてくださった絵でした。これを描いた時の写真を担当者に見せてもらいましたが、かわいらしい熊の縫いぐるみを机の上に置いて、その場で描いている証拠写真が残っております。縫いぐるみはほんとうに普通の縫いぐるみなんですけれども、描いてある絵のほうは、かわいらしいけれどもちよつと怖い、大変、柚木先生らしいものに仕上がっております。これは自信作ですの、ぜひお持ち帰りいただければと思います。

それでは大会声明を読み上げさせていただきます。



大会声明

来年は戦後80年になります。

戦争中は激しい言論統制が行われ、また物資不足から紙が手に入らず、出版活動はかなり制限されました。田辺聖子さんが戦中、あまりに読むものがなくて、畳をひっくり返したとき下に敷かれていた古新聞をむさぼり読んだ、というエピソードをどこかで聞いたことがあります。それくらい人は活字に飢えていました。おそらく情報にも飢えていたでしょう。いっぽうで、書きたいことが書けないならと断筆する人もたくさんいました。

1945年に戦争が終わり、占領期にはGHQの検閲などもありましたが、出版活動は一挙に加速しました。カストリ雑誌から文学全集まで、とにかく、読みたい、書きたい、というエネルギーにあふれていたように思います。もちろん時代の趨勢もあり、そこから一直線に拡大していったわけではありませんが、みなさんもご存知のように、その後、1996年までは、基本的に出版活動は拡大成長してまいりました。

そして以降、われわれは長く続く出版不況のなかにいます。

人々が書いたり読んだりしなくなったのか、と言えばそんなことはありません。文字を使った情報交換は、ネットの登場によりむしろ飛躍的に多くなっています。単に、本を読まなくなったのです。ではなぜこういう状況になったのか。

出版は、英語ではpublishと言いますが、これはpublicの動詞形です。つまり、公にする、という意味です。印刷技術が発達する以前、publishは、お披露目する、という意味でつかわれていて、作者が自ら、人々の前で読み上げることを意味していたそうです。（高宮利行『西洋書物史への扉』岩波新書、2023年）

出版とは、誰かが書いたものをお披露目する、公にする仕事なのです。

しかし、今は誰もが自由に発信できる時代であり、そういう意味では誰もがパブリッシャーになれます。そうしてパブリッシュされた情報がネットにあふれている。戦争中とは逆に、人々は情報の海でおぼれそうになっているようにみえます。

そして、本を聞く余裕を失っているのではないのでしょうか。

しかし、だから本はもう必要ない、のではなく、いまこそ必要なのだと考えます。

われわれが作っている本は、電子書籍も含めて、きちんとその質を担保しています。著者名があり出版社名があり、内容に責任を持っています。そのことの価値は、情報がフェイクだらけになっていく世界にあって、ますます高くなっていくはずです。

世の中に必要であると思つた情報を広めていく、公にしていく、という使命を、われわれはこれからも変わらず果たしていく。その決意を新たに、大会声明といたします。

2024年5月7日

第63回 全出版人大会

■文部科学副大臣の祝辞

わが国の文字活字文化を 長く後世に伝えていく



今枝 宗一郎
(いまえだ・そういちろう)

本日は第63回の全出版人大会がこのような盛大な方たちで開催されますこと、心からお慶び、お祝いをまず申し上げますと思います。日頃、皆さまにおいては、出版活動を通じて1つの本をつくり上げるというのは、本当に多くの方がさまざまな努力と汗で尽力をいただいていること、心から敬意を申し上げます。というふうな思っております。

先ほどの大会声明にもございましたとおり、戦時中はやはり活字や情報を得ることすらできず、今では全人類がパブリッシャー時代にもかかわらず、当時は誰もパブリッシャーすることもできなかった。こういう状況において、本当に営々と出版人としての矜持を保ち続けながら、心から敬意を申し上げます。そして、本日は、表彰を受けます長寿

者の方々、また永年勤続者の方々にも、心からお祝いを改めて申し上げますと思います。

文化・芸術を創造し、享受し、そして文化的な環境の中で生きる喜びを見いだすことは、人々の変わらない願いであります。中でも、出版活動を含むわが国の文字・活字文化は、人類の長い歴史の中で培ってきた知識を長く後世に伝えて、さらに人々の豊かな人間性を涵養する上でも欠くことができないものだと思います。

いわゆる社会の成熟とともに、デジタルだとかAIだとか、こういったものが、必要不可欠な社会であるというふうないわれで久しい昨今ではあります。出版界を取り巻く環境も急速に変わりつつありますけれども、出版物に求められる、大切な役割というものは変わりません。これからは出版界に楽しみや感動、知識や課題、これ

ら乗り越える示唆、こういったものを求めるとともに、出版物を通じて新たな人類としての歴史的な、また社会的な、経済的な価値を生み出していくことだと考えております。

思うに日本では、学ぶことのみならず、また感動を得るといふのみならず、その本を手にとったその時の情景、例えば、本



第62回と第63回、風呂敷の競演

屋さんや古本屋さんで、とある本を受け取った時、そんな時をどんな思いで皆さんは感じておられるでしょうか。本は人生とともに、やはり刻んできた伴走者ともいえるのではないのでしょうか。未知の本との出会いを広げていくことは、私たち人類が豊かな人生を送る上で、不可欠な世界共通の文化となるもので

あります。

「図書館戦争」というマンガもございましたけれども、まさに図書館の自律性を守るために、これは出版の自律性を守るためにも、若者たちが真摯な思いを持って行動をする、そういったものを楽しく、マンガで表現し伝える。そんなこともお取り組みをされているというのも、私にとりまして本当に喜ばしいところでございます。

文化庁におきましても、わが国の多様な豊かな活字の文化の海外発信に向けて、海外での翻訳家の方々の発掘・育成に加え、出版社の皆さまによる作品の海外展開に対する支援を行っていくとともに、アニメやマンガ等をはじめとする次代を担うクリエイターを育成するため、新たに独立行政法人日本芸術文化振興会に、複数年度で支援をさせていただく基金を設立いたしました。財政当局から「単年度予算で」と厳しく怒られながら、政治的につくるのは大変だったのですが、弾力的に支援を行うスキームというものを構築したところであります。

折りしも、文化庁の京都移転からちょうど1年が経過したわけでございます。今回の移転を機に全国各地からわが国の文化芸術を世界に発信して、そして

次の世代に伝えていく役割を強力に果たすことで文化と経済の好循環を図るべく、そして文化芸術立国の実現に向けての取り組みをより一層推進していきたいと思っております。そのためにも、純文学もやはり重要な基礎の部分でありますので、われわれも勉強させていただきました。さまざま分野にも飛躍をしていきたいと考えております。

もちろん著作権も守らせていただながら、AIやデジタルの時代をどのように、より良い形で多くの方に感動と成長と、そしてこの社会全体の、人類史全体の発展までつなげていけるのか、われわれは挑戦を共にしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。と思います。

出版文化の意を鑑み、文字活字に親しむ機会を広げていくことは、本当に重要であります。皆さま方におかれましても、今後とも質の高い出版物のご提供を通じて、わが国の文化芸術、わが国の歴史、世界の歴史のさらなる成長・発展のためにご尽力を賜りますことを心からお願いを申し上げます。皆様のご健勝、ご多幸を願って本日の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

■国立国会図書館長の祝辞

出版界と図書館が
支え合いながら知の創造を



倉田敬子
(くらた・けいこ)

本日は第63回全出版人大会が多くの方のご列席の下、このように盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。また長寿祝賀、そして、永年勤続表彰をお受けになる皆さまの長年にわたる出版界へのご尽力に深く敬意を表し、謹んでお祝いを申し上げます。

書きたいというエネルギーに支えられ、大きく拡大成長し、実に多様な豊かな出版物が生み出されてまいりました。納本制度により築かれた国立国会図書館の蔵書は、その出版活動の記録であると思います。書庫に並ぶ膨大な資料を目にする時、皆さまが情熱を傾けて作られてきた本の作成過程が目に浮かび、わが国の出版活動の素晴らしさを実感いたします。出版界の皆さまの長年にわたるご協力を心よ

り感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きのご協力をお願い申し上げます。大会声明では、世の中に必要であると思った情報を広めていく、公にしていこうという使命を、これからも変わらぬ果敢としていくと高らかに宣言されました。人間の知的営為の所産である出版物は日本の文化を形成し、その継承・発展に大きな役割を果たしてきました。大会声明でも言及されましたように、事実とは異なる情報を簡単に流すことが可能になってきている現在、出版に対する社会的信頼、また出版が有する公共的な価値は一層高まっていると確信いたします。デジタル化が進む社会において、これまで印刷物を中心にされてきた知識や情報の流通は、インターネット上での情報流通との関係を考えなければな

らない時期に来ているというふうに思います。これは情報を静的に固定させる印刷物というメディアと、常に更新・変更がなされる動的なデジタルメディアとの関係を考えなければならぬということの意味していると思います。国立国会図書館は納本制度に支えられ、戦後築いてきた紙の印刷物を中心とする蔵書を、国民共有の文化的資産として長く保存し、国民の知的活動の記録として後世に継承するという任務をこれからも確実に果たしてまいりたいと思っております。それと同時に、急激に変化するメディア環境に対応した知の基盤をいかに構築していくかも模索する必要がありますと考えております。その一環として、従来の印刷物に加えて、昨年1月から有償の電子書籍、電子雑誌を、国

立国会図書館法に基づいて収集することも開始いたしました。この事業も少しずつ拡大を進めており、皆さまに一層のご協力をいただけるよう、環境整備に努めてまいりたいと存じます。新たなメディア環境に対応した知の基盤の構築は、元より図書館だけで実現できるものではありません。出版界と図書館がお互いに支え合いながら、知の創造の循環において、車の両輪の役割を果たしていくことが大切だと存じます。国立国会図書館は知の基盤の構築という理想の実現に向かって、出版界の皆さまと手を携えて歩みを進めてまいりたいと思っております。結びに、本日ご臨席の皆さまのご健勝と出版界の一層の発展を祈念いたしまして、私のあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

■長寿者祝賀の辞

専門的な知見や深い洞察力と
広いネットワークを次の世代に



堀内丸恵
(ほりうち・まるえ)

第63回全出版人大会にあたり、長寿のお祝いをお受けになりました22名の皆さま、おめでとうございます。心よりお祝い

を申し上げます。皆さまは、昭和、平成、令和と激しく変わり続けた社会のなかで、出版の仕事に携わり、有

益な知識や情報、心動かす物語を、多くの人々に伝えてこられました。出版文化に対する皆さまの多大な貢献に、あらためて感謝を申し上げます。一方で、大正期に出版市場が急速に拡大してから一世紀が経ちました。現在、皆さまの後輩たちは、デジタル化や少子化、グローバル化といった大きな社会変動のなかで、出版界の次の歴史を築くべく、日々奮闘しています。こうした状況において、皆さま

がそれぞれの豊富な経験から得られた、専門的な知見や深い洞察力、広いネットワークは、次の世代にとって大きな糧となるに違いありません。どんな時代においても、皆さまが長年担ってこられた、有益な知識・情報や、心動かす物語を、形にして多くの人々に伝える、さらには後世に伝えるという、出版文化が担う役割は、変わりません。人生100年の時代において、70歳はまだ若き世代と言えます。皆さまにはどうか、

今後出版界を見守り、これまでのご経験を出版文化の未来にお役立ていただけますよう、そして後輩たちを応援してくださいませよう、お願いを申し上げます。最後になりましたが、これからも健康で充実された日々を送られますよう、皆さまの益々のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、おめでとうございます。(大会副会長、集英社会長)

■長寿者代表の謝辞
教科書は子どもの好奇心の窓



吉田直樹
(よしだ・なおき)

第63回全出版人大会におきまして、長寿者祝賀をお受けすることとなりました。同じく祝賀を受ける22名を代表して、心よりお礼を申し上げます。本大会の開催にご尽力いただいたすべての関係者の方々にも、また、ご来賓・ご参加の皆様、本当にありがとうございます。

かれこれ50年近く、出版の世界、中でも教科書出版の世界に身を置いておりましたが、自分は、ひたすら編集と営業の現場を駆け回っていただけの人間です。このような場で、何を話さなければいいのだろう。難しい話は苦手だしと、そんなことを考えていましたが、ちょうど昨年、第62回大会で、同じ立場でご挨拶された実教出版社長の小田良次さんに「どんなもんでしようね」と打ち明けたところ、「いや、いや。吉田さん。そんなに深刻に考えなくていいですよ。長寿者の謝辞なんだから」と言われ、「そうか。話がどこに行こうと、年寄りだから大目に見てもらえるか」と、もしか

したら小田さんは違う意味で言われたのかもしれないが、ぜひぶん気が楽になりました。

自分は1954年(昭和29年)の生まれで、1977年、大学を卒業してすぐ今の光村図書出版に入社しました。それ以来、ずっと同じ会社におります。弊社・光村図書出版の創業は1949年(昭和24年)で、それまでの国定教科書が、民間に移管された、いわゆる検定教科書使用開始の年です。それこそ雨後のタケノコのように、多くの民間会社が教科書発行に乗り出しました。弊社もその中の一つでした。幸いなことに、会社は今年で創立75年を迎えます。自分は、そのうちの46年間を光村図書の一員として過ごし、気が付けば最古参になってしまいました。

実は先月、児童文学者の山下明生さんと、久しぶりにお会いする機会がありました。弊社の児童文学誌『飛ぶ教室』のインタビュー企画に、強引に割り込んだ次第ですが、若い頃に自分

が担当した山下さんには、弊社の教科書や雑誌にもいくつも作品をいただきました。ただ、それより何より、「よく飲みに連れて行ってくれたなあ」というのが一番の思い出です。「海のコウモリ」や「カモメの家」など多くの物語を多く書かれています。山下さんですが、そのスタートは編集者だったというお話を、以前から聞いていました。この日も、手塚治虫さんの



担当を命じられ、先輩社員に、「先生の原稿がもらえるまでは、帰ってくるな」と送り出されて、歯ブラシとパンツの替えを持って、富士見台のお宅に張り付いた話など、本当に面白く聞かせていただきました。

インタビューの最後、「作家という立場からでも、元編集者という立場からでも、今の若い編集者に伝えたいことはありますか」という質問に対して、山

下さんは、「今の人たちは、書き手と会うことをしなくなつた。会わなくても仕事は進む時代になったわけだけれど、自分たちの時代は『人と会う』ことが大事だからそうしていたのではなく、『人と会う』ことが楽しいから、面白いから、そうしていた」と言われました。その言葉を聞いて、本当にそうだったと、その場で強く頷いたものです。

教科書などと言うと、知らない方は、「さぞや勉強好きな、真面目な人間たちが作っているんだろう」と思われるかもしれませんが、とんでもありません。自分が新入社員だった頃の編集会議など、まさに「人間動物園」の様相でした。

教科書の編集会議というのは、研究者・作家・実践家といった編集委員(いわゆる先生)と編集部(つまり社員)とが集まるわけですが、入社してすぐの自分の仕事は、先輩の女性社員から「〇〇先生はハイライト、〇〇先生はセブンスター」とタバコの銘柄を言われ、それを買ってくることでした。今なら「私は、こんな仕事をするために、この会社に入ったわけではありませぬ」と食って掛かる新人もいるでしょうが、当時の僕は「先生一人一人のタバコの銘柄を覚えてい。先輩の〇〇さんはさすがだな」と感心していました。会

出版平和堂

「第56回 出版功労者顕彰会」を
11月6日(水)出版平和堂にて開催します

問い合わせ：一般財団法人日本出版クラブ

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32 出版クラブビル 5F

TEL 03(5577)1771 <https://www.shuppan-heiwado.jp/>



議が始まると、先生も社員もあつたものじゃあない。「こんなものが原稿か」「何だと」との大論戦。あげくには、ご自身の原稿を破り捨てて、桜吹雪が舞う中を退席される先生も目撃しました。その時代の先生の一人がお亡くなりになって、お別れの会に呼ばれましたが、奥様が、「あなたの会社の編集会議がある日は、今日は遅くなるからと、主人は本当に嬉しそうに、出かけて行ったものです」と、そんなお話も聞きました。

自分は教科書でも、国語教科書の担当が一番長かったので、作家や絵描きさんのお付き合いの機会が多くありました。原稿でも挿絵でも、お手紙を出して、依頼の趣旨や条件を伝える。「お会いしましょう」のお返事がいただけたら、直接にお会いして意を訴える。運よく引き受けていただけたら、仕上がり待ち、「できました」の連絡があれば、ドキドキしながら受け取りに行く。原稿は直筆。絵は原画です。「人と会う」のが楽しかったと申しましたが、昭和の時代、データのやり取りなどなかったから、そうするしかありませんでした。

受け取りだけではない。一か所でも直しがあれば、また頼みに行く。当然、直しができたら、また受け取りに出かける。後から思うと、直しというのも、書き手の方の勘違いやケアレス・ミスなどではなく、ほとんどは駆け出し編集者の説明不足が原因でした。あちらもわかっていなくては、どなたも文句を言わず「わかりました」と引き受けてくださいました。今思うと、顔から火が出そうな失敗もありましたが、そんな一つ一つが人生の宝物です。

自分は、教科書の説明に呼ばれた時、「教科書は窓です」という話をよくしています。手に取っていただければわかるはずですが、教科書は本当に薄い本です。国語教科書にしても、この国の文化を、漏れなく詰め込

むことはできない。でも、「ある言葉」「ある人」との出会いが、ある子にとって「教科書には載っていないかったけど、もっと知りたいな。自分で探しよう」というきっかけになるかもしれない。「教科書は窓です」というのは、そうした意味です。子どもたちには「昨日まで壁だったところに、窓ができた」。そんな思いを経験してもらいたい。その思いは、今も変わっていません。

今日は、あっちに行ったり、こっちに行ったりの身の上話にお付き合いいただき、誠にありがとうございました。

（光村図書出版社長）

■永年勤続者表彰の辞

もつと寛容性のある世の中に



小野寺 優
(おのでら・まさる)

本日、第63回全出版人大会において、永年勤続の表彰を受けたられた333名の皆さまに心より感謝とお祝いを申し上げます。皆さまは、出版界で各社から推薦を受けた勤続15年以上の方々と同っております。この15年というのは、世界を揺るがす事件や災害が勃発した

時代でした。国内では東日本大震災をはじめ、多くの地震や豪雨などの天災が続き、海外ではウクライナ侵攻、パレスチナ問題などをはじめとして、今も各地で戦争や内戦が続いていまます。そして何より新型コロナウイルス感染症の世界的流行がありました。

コロナ禍によって他者との関りを極端に制限され、在宅を強いられた三年間は、ITの飛躍的な発達を促しましたが、一方で自らの権利や主張に対する人々の意識を極端に強めました。そしてその結果、時に自らの正当性ばかりを声高に主張し、他者の立場や気持ちを推し量ることのない風潮が生まれたように思います。現在の社会からは誰かが多少の過ちを犯したとしても「まあまあお互い様」と言える、そんな寛容性がどんどん失われていきます。そしてそれは、現在の世界情勢と無縁でないように思えてなりません。そんな時代にあつて必要なのは古今東西の出版物を通じて、

他者を知ること、自らを客観的に見つめ直すこと、視野を広げることではないでしょうか。今だからこそ出版物にできることがある。出版界で15年間を過ごしてきた皆さまは誰よりもそれを知っていらっしゃるようになっています。

今、出版界は大きな変革の時にあり、出版物の必要性そのものが問われています。今後、皆さまが出版界のリーダーとして出版物の重要性を一人でも多くの方に伝え、ますます活躍されることを祈念し、簡単ではございますが、お祝いの言葉といたします。本日は誠にありがとうございます。

（大会副会長、河出書房新社社長）

出版記念会

喜びを分かち合える出版人のホールでお祝いの会を。

★会報「出版クラブだより」にてご紹介して、祝賀申し上げます。



受賞祝賀会

受賞の榮譽に輝く喜びを祝賀する集いに、出版クラブホールを。

★ご案内状の作成、印刷、宛名書き、贈呈記念品、花束など、お手伝いのむきもお申しつけ下さい

●ご予約・お問合わせ

出版クラブホール

Tel 03(5577)1511 千代田区神田神保町1-32 出版クラブビル

■永年勤続者代表の謝辞

節目の年に



金子 文

(かねこ・あや)

本日は、このような盛大で晴れやかな式典にお招きいただき、永年勤続表彰を賜りましたこと、大変光栄に思い、感謝の気持ちでいっぱいです。誠にありがとうございます。本日、一緒に表彰されました333名の皆様は、各現場のプロであり、出版界を支えるベテランの方々でいらっしゃるものと存じます。その代表というには甚だ僭越ではございますが、このような機会を頂戴いたしましたので、お礼の言葉を申し上げます。

と申しますのも、今年、当社は、書籍・取次業「高和堂」として創業85周年、出版社「高橋書店」として設立70周年を迎える節目の年、ということでお声をかけていただきました。1939年の創業は、第二次世界大戦が勃発した年であり、戦後、ようやく世の中が明るくなった頃、出版部を創設して日記製作をはじめ、出版社「高橋書店」にいたります。当社が発刊しております日記の中で「商品番号1番 当用新日記」は、その頃

から、今も変わらず愛されております不動のロングセラーです。そして現在、生産のピークを迎えております2025年版は、全303点のラインナップを発刊予定です。当社は生活実用書や資格試験・就職対策書、また『さんねんないきもの事典』シリーズをはじめとする児童書まで、幅広く発刊しておりますが、会社の歴史は日記・手帳・家計簿から始まっており、今も屋台骨となっております。

私自身は1999年入社、バブル崩壊後、山一証券が自主廃業した90年代の超就職氷河期世代です。最初は書籍編集部配属になり、有難いことに今も書店様で扱っていただいております『漢字検定「頻出度順」問題集』や料理書などを企画・担当した後、日記編集部の製作に入り、以来、日記・手帳の生産管理という、かなり特殊な現場で長く経験を積ませていただいております。

一般の書籍と違い、文章もなく、日玉と罫線だけの手帳は、製作が易しいように思われるか

もしれませんが、1年間365日、1日に何度も開いては記入し、とことんお使いいただくため、その仕様は「開きやすく、こわれにくい」という、究極の造本設計と言っても過言ではありません。かがり、上製、ピニール表紙のベタ貼り、スピンドル、三方金と、小さな手帳に、辞書並の、製本技術を詰め込んでいます。



用紙はすべて専用用紙を抄造し、毎年、立会を行っています。数値に表れない書き心地、透け具合まで気を遣っておりますし、薄い用紙ですので表裏の罫線のズレがあると、毎日の筆記にストレスを生じさせるといふことで、印刷時の見当合わせは絶対です。編集部もまたしかり、罫線の太さまで商品ごとにこだわっていますので、例えば、

電車の中で手帳を広げられている方の、ちらりと見えた罫線や月数字のフォントで自社の手帳かどうかわかってしまう位です。その他、PVCのカバーも全点、毎年、色味を調整して原反から生産し、スピンドルオリジナルのほどこけにくいものを作り、すべて手で帯掛け・投げ込み等のアッセンブリーをするという、気が遠くなるほどの工程を重ね、1年間かけて製作しております。ここにいらつしやいます用紙、印刷、製本の皆様には、そら恐ろしい話に聞こえることと思えますし、私どもも、これまでの品質要求度に応えてくださる協力工場の方々には、本当に足を向けて寝られません。

先ほど申し上げましたように、古い商品になりますと、30年、40年と使い続けてくださっているお客様もいらつしやるため、お客様の方が商品に詳しいほどです。メモページの行数を変えただけでも「使い勝手が変わってしまう」とお電話でご意見を頂くこともございます。が、最後には、どれだけこの手帳を人生の相棒にしてきたかというお話になることも多く、本当に有難いことだと感じています。その分、40年間綴ってきた次の1冊に、または、連用日記のように3年、5年書き綴ってきた途中で壊れるようなことがあれば、その年月を修復することは不可能です。お客様の人生の一

端を担っているという責任の重大さを、日々ひしひしと感じております。

そして、一般の書籍は発刊してひとまず完成となりますが、日記・手帳は、唯一、手に取った方が1年間記入して、初めて完成する出版物になります。しばしば発行部数が基準になることの多いこの出版界において、発行部数とは対極にある、お客様にとつてたった1冊の、かけがえない、人生の物語を記す本だと考えております。

そんな風に、日々、お客様の想いを感じられることは、大変幸せなことです。おそらく出版に携わる方の多くが、届けたい想いがあり、暮らしと文化の向上を願っている中で、私どもも書籍出版、日記手帳出版の両面から、少しでも出版文化に貢献できていければ幸いです。

日記・手帳においても、当然ながら、スマートフォンとの共存や文字離れといった課題に直面しておりますが、それでも今の若い方々はライフログ的に使われている方も多く、かえって判型の大きい手帳が好まれたり、1日の記入欄が多いものが好まれたりと、人が根源的に持つ「書く」「読む」という欲求は、一層深掘りされていくのではないかとも思っています。

出版業界はソフト面でも、ハード面でも、課題と改革の必要性は高く、私どもも資材の高騰

第63回全出版人大会
記念講演レポート

「息を止めて海に潜る」
岸 政彦氏（社会学者）



岸政彦氏が監修をした『沖縄の生活史』（みすず書房）、『東京の生活史』『大阪の生活史』（いずれも筑摩書房）。掲載されている計400名の“無名の人々”に行った調査方法がとてもおもしろい。

ひとりひとりに時間をかけてインタビューを行い、言葉ではない文字間や行間から見えてくるものを拾っていく。インタビュアーである64歳の娘から何を聞かれも「もう覚えてへんわ」と答える大阪に住む96歳の女性に代表されるように、もはや細かな事実関係はどうでもいいと氏は語る。「お母ちゃん、つらいこと全部忘れてよかったね」という母娘の関係性に読者は惹きつけられていくのだ。

言葉や文字として記された一行には、インタビューの場面を詳細に記録された映像よりも圧倒的な情報量があるという。沖縄戦が終ったあとの鮮明に覚えているトマトの赤い色。事実関係は覚えていなくても、赤いトマトを想像しただけでその場所に連れて行かれる感覚。語りを聞いたその声と文字にした時の凄さと威力は映像を遙かに凌ぐという。ここに出版の可能性がまだまだ残されている。

*岸政彦氏の詳細な講演録は次号の『出版クラブだより』にて掲載予定です。



私、超党派の学校図書館議員連盟と活字文化議員連盟の事務局長を務めております、衆議院議員の笠浩史と申します。本日は第63回の全出版人大会のご盛会、誠にありがとうございます。

現在の活字離れというものの、あるいは地域からまちの本屋さんがなくなくなるかも知れない。この問題に対し、書店を「日本の重要なコンテンツ産業の一翼」と位置付けて、経済産業省もよう

「本を届ける」という、これらで諸先輩方が積み上げてきたこの道に、一層、尽力してまいりたいと存じます。

最後にとなりますが、本日、永年勤続を表彰された皆様と、お集りの皆様のみならずのご活躍、そして、出版業界のさらなる発

いくため、そして子どもたちの未来のために、書店、そして皆さま方の業界を元気にしていくために応援をしていくことは、党派を超えて国会議員みんな同じ思いでございますので、しっかりと私も事務局長として務めていきたいというふうに思っております。



笠 浩史
(りゅう・ひろふみ)

■第二部 懇親パーティー 祝辞

もういちど書店を元気に

から輸送の問題まで、取り組まなくてはならないことばかりですが、長く本づくりを支えてくださる製紙会社様、印刷所様、

製本所様、流通を支えてくださる取次の方々、そしてお客様に手渡してくださる書店員の皆様に感謝を申し上げるとともに、

「本を届ける」という、これらで諸先輩方が積み上げてきたこの道に、一層、尽力してまいりたいと存じます。

最後にとなりますが、本日、永年勤続を表彰された皆様と、お集りの皆様のみならずのご活躍、そして、出版業界のさらなる発

展を祈念いたしました。謝辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。
(高橋書店生産管理部)

(衆議院議員、学校図書館議員連盟・活字文化議員連盟事務局長)

■乾杯

本と友だちになる環境を



下中美都 (しもなか・みと)

本日、表彰されました永年勤続の皆さま、そしてご長寿の皆さま、改めましておめでとうございます。こんなにたくさんの方々とお酒を飲みながら本のこと話せるという機会をとってもらいありがとうございます。

先ほどの岸先生のお話、何か胸倉をつかまれたような、心に残った話でした。今日お集まりの皆さまはとりわけ本に育てられ、そして本を作り届ける仕事に育てられたという、他の方よりも確かな実感をお持ちの皆さま方だと思います。本に育てられたという気持ちを持ちながら、このところの世の中の大きな変化に毎日、隔世の感があるなど思うような、特にこの3年の変化はげしいと思います。もしかして人の心が変わったのか、なにか思うぐらいの大きな変わりように思います。

けれども、本をつくって届ける仕事は人を夢中にさせる仕事だということに関しては、何も変わっていないように思えます。その届け方、それから流通、

いろいろ変わっておりますけれども、今日お集まりの皆さま、そして表彰された皆さまは多分、自分を育ててくれたこの業界で役に立ちたいというお気持ちだだと思います。しかもそれは、具体的にどうやったら役に立てるかという気持ちで、強くお持ちではないでしょうか。

書店が減っているということ、は明らかにあります。私もちょうど先週でしたか、『本屋のない人生なんて』（三宅玲子著、光文社）という本が今出てまして、その本の中に出てくる荻窪の「Title」という本屋さんに行きました。「Title」は静かな本屋さんで、本をつかった人、選んだ人の静かなエネルギーがぎゅっと凝縮したような本屋さんで、そこへ1回入ると、もう棚から目が離せないんです。そして本をずっと選んでいて、自分の好きな本を選ぶという喜びを、おなかの底から感じるような、そんな小さな小さな本屋さんです。けれども、書店が1店舗なく

なるごとに、そういう本を選ぶ幸せというものが消えてしまっているのだと、思ったりもしておりますけれども、ただ、喜入委員長が大会声明のなかで、おっしゃったように、本は今とても大事な存在であります。そして全国の4分の1の市町村で、書店さんがない市町村があるという状況ではあります。



ども、図書館に行きますと、ここは私の居場所という老若男女、喜んで本を読んでいるというか、勉強している、それこそ生活、ライフスタイルに組み込まれているということを目の当たりにします。そういうことを見るにつけ、せっかく今日ここに集まった皆さんが、本のために具体的に役

に立ちたいと思つてらっしゃる方の力をお借りして、例えば、図書館の入り口に小さなキオスクでもいいから本屋さんを作れないかって思うんです。状況はいろいろ変わってきていて、実際に図書館で出合った本がそこで注文できる図書館もあるんです。このように目の前のできることから、小さなことから始めて、ぜひ本屋さんで本を買う楽しさということを具体的にできないかなと思えます。

例えば、何度も何度も図書館から同じ本を借りてきてる子どもがお母さんに、「その本を買ってほしい」と言つと、「何度も借りてるんだから、もういいでしょ」と言つたというの、間違った。先日、絵本館の社長の有川裕俊さんが教えてくれました。何度も借りてる本は買ってあげるべき本で、一緒に暮らすべき本です。うちに連れて帰って、その子にとつて友達になる

本です。そこで買ってあげることで子どもの自己承認、自己肯定感上がるんだそうです。借りて読む本、そして自分の書棚に連れて帰って友達になる本、両方があるといいと思うし、図書館でお話をする時は、気に入った本はぜひ買ってもらいたいんだという話を必ずするようにしています。出版界のいまの現状を「困ったことだね」だけじゃなくて、何か具体的にできる仕組みを皆さまとぜひ考え合えたらうれしいなと思う次第でございます。

それでは、今日お集まりの皆さまのご健勝と出版界の交流、そして、本ができるだけたくさん子どもたちの手に渡って本と暮らせる、そういう社会がこれからは続きますように願つております。それではご唱和ください。乾杯。
(出版梓会理事長、日本出版クラブ理事、平凡社会長)

出版クラブ維持員動静

▽代表者変更(敬称略)

NHK出版 松本浩司 ↓ 江口貴之

芸術生活社 正井一真 ↓ 深田徳良

建帛社 筑紫恒男 ↓ 筑紫和男

光文社 武田真士男 ↓ 烏山公夫

主婦の友社 矢崎謙三 ↓ 丹羽良治

響

増進堂・受験研究社 岡本明剛 ↓ 岡本泰治
第三文明社 大島光明 ↓ 松本義治
大日本印刷 北島義俊 ↓ 北島義斉

日本文芸社 吉田芳史 ↓ 竹村

響

出版 歳時記

▽「Z世代」と呼ばれる若者と大学で接していると、勝手が違っており、時代の変化を痛感する。彼・彼女たちにとつて、スマートフォンはもはや電話機ではない。先生からの電話でも、スマホに登録されていない番号なら出ない。メールもあまり見ない。やりとりはもっぱらLINEなどのSNS(ソーシャル・ネットワーク・キングダム・サービ)ス)である。

▽本はどうか。授業中、この1年間、教科書以外の本を読んだことがあるかと聞いたら、手を挙げたのは半数弱。その多くは電子書籍だった。紙媒体の雑誌を読んだ学生に至ってはもっと少なく、1割ほど。でも「文春砲」の記事はスマホで読んで知っている。▽紙は紀元前2世紀ごろ、中国で発明され、飛鳥時代に日本に伝わった(日本製紙連合会のホームページより)。大石静さん脚本のNHK大河ドラマ「光る君へ」で、平安時代も紙が貴重品だったことが描かれていた。紫式部や清少

納言の名作は、紙を持つ権力者の後ろ盾があって生まれた。▽5月末、日販とトーハンが2024年3月期決算を発表した。本業の取次事業は厳しく、目を引くのが返品率の高さだ。両社とも全体の返品率は30%台後半で、雑誌に限れば48%前後。▽週刊誌ナンパワンの「週刊文春」でさえ、日本雑誌協会発表の印刷証明付発行部数は24年1~3月期で42万5千部。発表

紙からネットへ 媒体は変われど

を始めた16年前と比べ、半減に近い。そもそもこの数字を載せていた雑誌の「マガジンデータ」も、紙版は21年版を最後に休刊した。返品率を裏付けるように、日本ABC協会による「週刊文春」実売部数は23年下半年で20万8千部だ。▽「媒体」とは伝達手段を意味する。それは紙からインターネットに急速に移っている。いまの20代は7割が紙の本より電子書籍を好む、というアンケート結果もある(マーケティング会

社「ナイル」の23年8月ネット調査)。▽ABC協会の「雑誌発行社レポート」は、08年から各誌のデジタル版のデータから各誌の部数が多いのは、デジタル版の部数が最も多いのは5万8千部の「日経ビジネス」、紙版(8万3千部)の7割。読み放題サービスのUU数(ユニークユーザー。閲覧者の実数)の最多は「Oggi」の21万1千で、紙版(3万部)の実に7倍である。▽「文春オンライン」の自社月間PV(ページビュー。閲覧回数)は3億3千万、外部サイトの月間PVが2億7千万。雑誌が読まれなくなったわけではないのだ。危機の正体は媒体である「紙」の価値は変わらず、大切な文化だ。▽しかし、5月刊「2028年 街から書店が消える日」(小島俊一著、プレジデント社)の中で、有隣堂の松信健太郎社長は「文化だから大切」では甘い」と喝破している。同感。本と雑誌と出版社と書店の未来のため、我々も時代の変化に対応し、変革しようではありませんか。(電)

編集雑記

☆今年度は2年に一度の理事の改選、4年が任期の評議員、監事の改選が重なる年です。校了時までには評議員会が終わっていないのですが、詳細は次号でお伝えしますが、今回退任なさる理事、評議員のみなさま長年お世話になりました。ありがとうございます。新たにのお務めいただくみなさまどうぞよろしく願います。

☆同時に昨年度を振り返る事業報告、決算報告も行いました。昨年5月に新型コロナウイルス感染症が2類から5類に移行され、ホール・会議室のご利用が増えました。近頃は予約が取れないというお声もいただいております。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。ぜひお早目のご予約をお願いいたします。

☆7月3日に新紙幣が発行されるそうです。キャッシュレス決済がここまで広がっているのに、わざわざ紙を新しくする必要があるのでしようか。

☆パリオリンピックが7月26日に開幕します。ヨーロッパの大会はいい試合が深夜から早朝ということが多く、寝不足の日々が続きそうです。

☆遅い梅雨入りでした。気象庁によれば、今年はいよいよその猛暑の夏になりそうです。ご自愛ください。(横)

出版クラブは皆さまの「クラブ」です。
お気軽にご利用頂ければと存じます。
出版イベントや各種会議・セミナー等
益々のご利用をお待ち申し上げます。

出版クラブホール・会議室

PUBLISHERS CLUB HALL

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32

出版クラブビル

TEL 03-5577-1511/FAX 03-5577-1772

<https://shuppan-club-hall.jp/>

神保町駅(東京メトロ半蔵門線、都営新宿線・三田線)

A5 出口より徒歩 2分

